



近世說美少年錄

初編  
四



~ 13  
3567  
4



門 へ 13  
號 3567  
卷 4

近世説美少年録第一輯卷之四

東都 曲亭主人編次



密使茶店小貴翰を傳ふ  
美婦子を携て情人を送る

登時若黨佐三次の錢下婚とて申乞巧亦うち對ひて。され禁臥們汝  
ホグ大膽多。這道中列臥と人踏と物も去。鈍は伎倆の憎けれども  
神詰の又さきとせせ。施行あらで取らぬ。檀那のゆるふ。口暗むる  
受載を。退去と。空々。速と。受取る。霜避菰六冷笑ひる。を  
鄙太よ。踏む。膳三枚折れて。投膏茶代ハ。鏝百文で。怪會無慈  
悲。吝。面多。の。檀那。の。寔。の。堪。忍。ま。然。の。と。問。鄙太。頭  
掉て菰公む。と。世。捨。られ。俺。們。膳。三。枚。踏。折。られ。膏。茶

早稲田 大學 図書館  
昭和 34.6.3 燹  
藏 書

代が、銀百も、金斬や、肋一枚、三十二文と知られり。野緒の胴鼓、黒箱の鹿骨でも、今時價が、何処か、返して、これ、聴か、せよ、さう、ぬくと、臥多、う、嘯、然、  
 一と、猪、弥、次、卒、八、鹹、声、を、苛、立、く、噫、流、六、が、心、弱、さ、く、物、各、三、廿、檀、那、あ  
 へ、寐、て、お、も、世、景、銭、百、で、人、の、骨、肉、を、買、れ、ん、然、る、を、受、取、る、と、ら、あ、は、え、見、真  
 利、小、錫、言、欲、通、野、計、の、汚、面、奴、が、ま、ま、バ、濟、ぬ、と、濟、さ、ぬ、と、麴、桶、鼓、く、と、相  
 槌、の、調、子、外、は、の、高、揺、搦、菰、六、騒、が、ぞ、噫、味、や、り、借、と、按、ま、る、は、銀、百、を、り  
 と、口、あ、り、と、一、文、檀、那、百、人、の、貫、の、バ、都、合、ら、ぬ、這、一、緒、の、優、德、衆、徒、金、百、兩、も  
 當、ら、る、の、を、受、と、ま、を、何、と、せ、ん、菰、野、計、で、齡、役、る、已、小、女、才、の、あ、る、は、菰、野、計  
 太、よ、これ、堪、忍、せ、よ、金、共、侶、和、解、ま、る、と、の、ひ、も、目、を、注、ま、れ、ば、氣、色、小、曉  
 得、る、卒、八、猪、弥、次、否、と、の、い、ぬ、陽、笑、と、誠、に、これ、い、れ、り、緯、と、分、る、哥、の、の  
 差、配、で、肋、骨、より、氣、が、折、れ、ら、ん、鄙、太、も、看、際、で、往、生、せ、よ、と、の、不、領、く、犬

蒲團新前より去る歳まで一菰も寝さる兄弟品の寛解る恩  
 愛平等血を分け、風をあれ恨まらぬ、い、ま、よ、ろ、く、宜、く、と、圓、く、治、る、麴、桶、の、は  
 ら、搦、げ、と、春、蠶、を、あ、笑、り、菰、六、を、佐、三、次、の、ち、對、ひ、く、目、今、皆、せ、ぬ、か、如、敵  
 て、ち、や、り、免、れ、ぬ、か、と、腕、く、折、れ、ま、れ、お、腰、は、怕、れ、形、の、ぞ、衆、徒、皆、納、得、仕  
 へ、ぬ、と、と、あ、る、あ、る、か、と、あ、る、を、え、る、頼、十、郎、介、の、は、お、い、ぶ、る、免、飲、と、同、を、果  
 ん、四、箇、の、乞、見、ホ、の、ぞ、う、い、ぬ、お、免、御、向、の、腹、の、卒、に、隨、ふ、ま、う、一、過、と、今、内、後  
 悔、免、さ、る、ぬ、と、途、巡、し、と、を、伏、ひ、く、玉、鐙、の、路、の、障、り、も、凍、解、ま、釋、て、温、と、死  
 夕、南、風、頭、痛、病、せ、折、込、も、あ、る、自、ら、佐、三、次、も、疾、視、回、ら、い、ハ、ま、い、の、と、共、ま  
 立、意、氣、揚、々、と、主、の、後、方、は、謀、添、ま、る、齊、一、急、ぐ、夕、向、暮、の、由、影、と、謀、添、四、箇、の  
 乞、見、の、流、の、下、に、隠、し、る、巨、刀、の、ひ、く、引、れ、故、く、声、を、お、け、後、より、竊、歩、し、追  
 獲、て、あ、い、せ、被、た、る、刃、の、電、光、不、意、を、撃、れ、佐、三、次、折、込、背、の、深、瘡、は、要、要、時、も

沿堪む苦と叫びて仆れる程もあらず見ホの頼十郎とて籠て競ひ搦  
 る物ともせむ。あらるる身を論と左右近づく猪弥次と鄙太が刃をう  
 落して怯むを透き至頂上捕え搦と投伏せ声ゆり立て汝ホを馬小似はも  
 刃を隠し合ひさ前剪徑せんとするが然らば人小頼れ後と問せも敢て菰  
 六卒八昔年奴とも推し。左ても右ても活て還さぬのせくらる引道は意  
 趣の本未説示さ本は色仇笠屋阿夏の両箇の密夫一箇和郎が  
 こそ物白の子さ産して今一人の財主小空笠前と喚く。送恨まの雲をそ  
 憑れて扱昏同ら埋伏せしをまざるや今の浮世倒る素人小施まを思の多  
 うち受ても不ぬと調諛のふを二人齊一撃をまを戦世の習俗を市人莊  
 客乞見ホも只殺伐を旨とて土一換ると喚れる兵法武藝を看做ふ  
 悍らばりのめきれ頼十郎は又さる小問答の違ゆる刀を尻りと抜合へ踏

込々々戦小程小猪弥次鄙太も身起し來て落る刃を搦取り太も亦背後  
 より撃んとする歩許る甲夜闇の倒臥する両箇の傷者にはまを撲地と跌た  
 御音小佐三次折伏の忽地の呼吸通て刃を杖小立あがる主と援け猪弥次と鄙  
 太と撃んとと殺締のつま隙るに奮撃の突戦入素れる七口の鐔音高く丁々  
 發打と豆小鏢を削りたる勝負の回小佐三次は又卒八と戦ふを急ぐ伏せ  
 小の身の深癩小眼眩して再撞と倒れる。その間の折伏鄙太が肩矢斫下  
 けく小の処へ懸く十々滅と刺をま程小鄙太の伏々刃を揚て折伏が  
 乳の下刀尖ゆる鬣然と刺を刺れるも折伏の鄙太が胸前刺串たて此彼  
 共の魂消る声と末期の一句ゆく臥累りと死にけり然程小頼十郎はも猪  
 弥次の大疾を肩して倭僮く処を疊りけり細頸丁と較合落し返る方小菰六が  
 向脛拂て菰倒れ背後小頼九郎声を被破と研る刃外に頼十郎は

修煉の大刀風掬ぎ去る。又頼九郎と戦ふ。一上二下、虚々實々。然し、も烈  
 志、義経の牙、頼九郎の右腕、小髻の髪際、彼此と既、深痕を肩、難捷下  
 と、あはけん透、引脱し、足、信と逃走。頼十郎、脱さずと、及、る刃を  
 拭ひ、も、喘々、追、程、ゆ、く、この、ま、幾、る、ま、近、邊、の、里、人、ホ、ホ、ホ、棒、を、扱、き、蕉  
 火を、振、照、し、群、々、と、走、り、來、り、頼、十、郎、と、押、當、り、鏢、の、始、末、と、語、問、小、声、罵、詈、を、と  
 罵、聲、ぞ、く、頻、ふ、拍、擇、し、と、け、れ、頼、十、郎、の、逃、る、奴、を、ぞ、れ、を、狙、殺、せ、し、ま、す、本、人、を  
 ら、ん、と、思、ふ、の、ら、ま、勢、ひ、危、地、る、れ、遠、の、ホ、追、へ、う、も、あ、ま、引、提、り、力、を、拭、ひ、斂、里、人、ホ、  
 這、條、の、鏢、の、趣、如、此、々、々、と、音、よ、り、尾、毛、を、詳、報、知、し、と、これ、の、管、領、家、の、御、内、人、陶  
 瀬、十、郎、と、喚、ぶ、の、人、俱、一、なる、兩、箇、の、後、者、あり、一、箇、り、死、し、一、箇、も、亦、大、疾、に、生  
 死、走、る、ま、に、彼、悪、棍、頼、れ、る、四、箇、の、と、馬、ホ、の、討、首、を、い、ま、死、ぶ、る、の、も、あ、は  
 誘、共、侶、を、と、先、の、立、く、舊、所、の、り、ま、る、る、片、息、を、菰、六、を、頂、撞、抗、を、披、扇

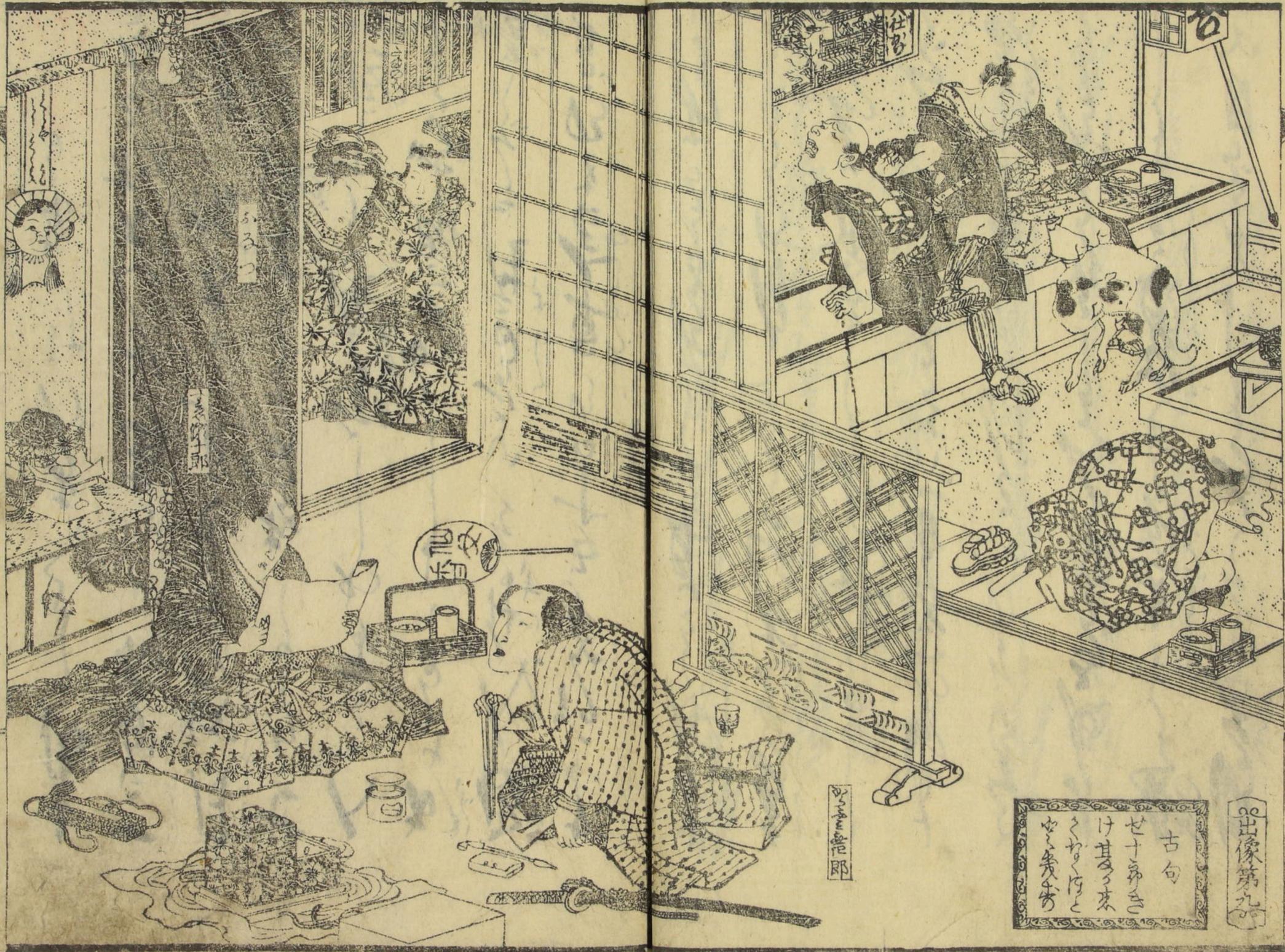
起、し、鏢、の、機、密、を、責、問、小、菰、六、苦、痛、の、堪、む、と、頼、九、郎、頼、れ、る、伎、倆、城  
 送、き、首、伏、し、頼、十、郎、ら、愛、を、小、の、惡、事、の、本、人、の、三、條、西、町、の、り、ま、る、る、池、澄  
 屋、龜、六、と、う、い、ふ、の、後、兒、頼、九、郎、ホ、と、あ、ま、れ、者、奴、を、ぞ、れ、を、逃、亡、し、れ、と、既、深、痕、を  
 肩、せ、し、追、捕、人、と、輒、々、に、下、り、後、者、佐、三、次、の、幸、ひ、の、り、死、を、凍、あ、る、の、後  
 送、し、置、て、る、里、老、連、速、小、醫、療、を、加、へ、ま、す、一、又、の、を、馬、の、死、せ、る、も、活、る、も、謀、之、の、沙  
 汰、を、ま、ら、し、め、り、れ、の、君、所、に、立、又、く、と、あ、れ、ら、の、よ、と、愛、を、あ、へ、し、里、人、の、中、西、三、箇、に、れ、と  
 俱、中、管、領、家、の、ま、あ、る、と、し、と、訟、ま、す、と、檢、屍、の、使、を、あ、ら、ん、夜、の、深、夜、回、り、と、し、と、  
 里、人、ホ、の、説、小、任、と、表、立、る、の、西、入、頼、十、郎、の、附、添、で、管、領、邸、に、送、り、  
 れ、る、里、人、の、佐、三、次、が、あ、る、醫、師、と、招、れ、る、と、と、療、類、小、術、を、盡、し、け、り、然、程、小、管、領、大  
 内、義、貞、主、の、陶、瀬、十、郎、與、房、と、千、本、の、里、人、ホ、の、夜、狂、の、訴、を、よ、り、と、言、の、虚  
 實、を、問、質、し、し、先、則、家、臣、朱、野、丹、に、親、任、を、請、く、千、本、の、畛、遣、し、猶、且、親、任、を、成



是れを以て然るを以て免されて吸えされて幾日もあらぬ何を證す云云  
 直好と一層殺む物狂ひ事あらんぞらん。是れは福鬼のいづくも是れを  
 願ふの察しあり。と云く傷の牽居られる。卿九郎と云く。證據をけり。悪  
 棍も是非と争ひする。頭を低く跪居り。登時丹三声高き。それ卿九郎  
 竹の方狀壁言ひ夏の不誼あり。その汝が妻あはる。非法の働た言語同断況や  
 不誼の證據を。さればそれ木偶の瀬十郎を知らむ。その情慾は  
 治遂さうけん送恨のより。谷をたのむ。証する。これ龜六を召よ。七年來汝  
 放蕩無頼の趣さ。不定なる。知まら。今飽ま。小歐懲む。いふ。實を吐く。死  
 こそ彼奴を歐む。と烈に指揮。小雜兵。小の美ら。と立。せ。卿九郎を推伏  
 せ。其口を揚ぐ。昔の皮肉の破。追。小歐。果。と。在下。四輪前  
 より。阿夏。舊。怨。乃。若。人。の。噂。より。て。津。心。の。変。を。瀬。十。郎。殿。と

情由ある故と。報する者のあり。久。恨。の。累。で。中。方。も。先。彼。人。を。聞  
 敵。小。後。阿。夏。を。殺。せ。と。計。較。し。現。疎。忽。の。術。の。後。相。違。ひ。を。さ。す  
 ぬ。首。伏。を。り。け。り。丹。三。と。介。と。陶。瀬。十。郎。が。り。ゆ。夏。も。亦。罪。の。一。  
 人の噂を聞き。と。音。領。家。の。御。内。人。を。殺。せ。と。大。膽。不。敵。の。罪。を。輕。く  
 木。偶。及。夏。十。本。を。里。人。も。命。の。意。を。よ。と。由。嚴。に。告。え。さ。す。身。に  
 暇。を。と。せ。り。卿。九。郎。の。獄。舎。に。殺。せ。る。あ。の。日。の。廳。の。果。け。り。有。右。而。朱。野  
 丹。三。の。卿。九。郎。が。首。伏。の。夏。の。顛。末。云。云。と。主。君。義。貞。を。告。え。あ。り。て。其。の。誦。め。と。讀。み  
 一。如。義。貞。勃。然。と。大。く。怒。り。と。然。り。と。然。り。卿。九。郎。の。此。も。借。味。死。罪。疾。速。に。梟  
 首。と。都。下。の。悪。俗。を。懲。ま。す。と。敦。圍。す。け。下。知。せ。し。は。これ。より。丹。三。の。次。の。日。卿。九  
 郎。が。首。を。刎。て。懸。く。河。原。の。梟。け。り。然。程。小。陶。瀬。十。郎。の。懸。の。十。本。の。里。人。も。と  
 共。侶。の。卿。九。郎。が。悪。事。の。よ。と。告。を。あ。り。て。の。夜。より。さ。を。告。め。る。け。り。と。も。藻。深。





美山集 第一卷 轉

十卷 轉

出像第九

古句  
 せしき  
 けき  
 かく  
 かく

美山集

美山集

十卷

あまのふ端近う。誘ひきてと母屋小入りて障子の陰小坐とられ。瀬十郎の推  
 辞小うとる。とほほとら。對ひて。登時元四郎が。その春も文公の災難。實券  
 君も買房卿も。折れ傳聞せし。ひて。駭死大く。る。後も左右。何月安ら  
 ぶ。ま。ま。ま。龍居のよ。は。左京北の憚り。故意不安。を。詔る。既。斯  
 日。ろ。経。文公の周防の山口。返。され。起行の。風声。あ。く。管。り。中途。に出  
 如此。々。と。竊。小。了。う。意。を。傳。ふ。と。あ。君。命。を。奉。上。と。あ。子。侯。と。久。の。只。寡  
 君。の。三。萬。里。小。路。賢。房。卿。も。使。を。立。ふ。と。仰。合。され。られ。も。三。人。數  
 ぞ。人。視。小。立。女。の。え。と。ま。ま。と。實。券。君。を。禁。め。ぬ。と。彼。卿。の。消。息。を。某。に  
 齎。り。酒。あ。ゆ。と。翰。匣。より。二。通。の。書。信。筒。を。り。と。遞。与。と。瀬。十。郎。の。受。戴  
 せ。と。ろ。く。小。披。死。る。と。兼。頭。卿。も。買。房。卿。も。共。小。名。残。を。惜。し。め。愛。顧。の。筆。に  
 題。れる。と。中。に。兼。頭。卿。の。消。息。は。今。よ。う。四。檢。前。の。比。緑。野。共。亭。に。空。待。と。る。

のみらるる。その花を折れ。と。ぬ。る。り。う。術。を。悔。い。れ。今。ゆ。ら。恨。を  
 ら。れ。せ。ん。鏡。す。め。り。と。書。せ。ぬ。と。それ。が。顔。且。赧。う。る。り。せ。ぬ。ぬ。ぬ。と。さ。さ。さ。と。い  
 や。く。巻。て。懐。小。う。ち。斂。め。今。小。な。め。ぬ。兩。卿。の。あ。い。情。を。辱。れ。前。路。と。急。ぐ。旅。る。れ。が  
 お。ん。合。書。と。なる。違。も。あ。ら。不。敬。と。ん。さ。せ。ぬ。と。只。是。實。券。の。お。執。成。を。頼。と。せ。ぬ。に  
 了。と。い。ひ。も。ち。あ。さ。ま。ま。と。元。四。郎。靈。時。と。推。察。め。く。さ。も。儲。小。あ。ぬ。と。君。命。を。依  
 して。と。と。赤。刺。を。偏。提。あり。一。支。盛。薦。め。袂。と。分。元。然。も。目。る。は。肆。月。の。旅。の。い。を  
 正。ら。と。慰。め。後。者。の。推。察。を。偏。提。を。ひ。き。薦。め。り。瀬。十。郎。の。感。謝。の。堪。ぬ。に  
 彼。共。下。戸。る。ね。が。い。の。さ。さ。と。不。意。の。數。思。も。覚。ぬ。と。暗。譚。時。と。想。た。瀬。十  
 郎。の。淨。小。の。立。て。天。井。と。遠。り。の。奥。ま。り。る。縁。頬。小。到。く。遠。く。お。も。程。に。忽。地。背  
 後。小。人。あり。と。あ。や。嘯。と。呼。笛。を。誰。る。ら。と。さ。さ。れ。ぬ。と。出。ひ。け。る。元。夏。阿。夏。の。珠。之。奴。を  
 携。て。來。り。あ。ゆ。候。と。登。時。阿。夏。の。邊。く。瀬。十。郎。を。掖。留。め。涙。さ。さ。と。声。を。後





あつた安兄も弥執袴の為の自愛あへと述べて刀を引提て立あぐを先四郎も亦幾  
條の口誼を舒て目送る程阿夏の隔亮とすて用ておもひや外を返す敷に深  
草の涙秋露の珠之ぬるを掖立てを立在るを一期の別と知るもあつたあ  
雲と流はく水の定をわたり人さあぐの江湖上あ一世の夫婦ありとりどもあつた百  
年の情人なり備人情どりのあつたあ女親郎才憐むべし亦公道とと論  
むまご非徳乱行人あぐ人あも似むとりのあつたあ

第七回 二賊剪徑して父女を屠る 一妻羞と忍く両難言は後よ

再説卿九郎が親よりけし三條西町の庖丁酒賈池澄屋龜六も憎しとて獨  
子に後れりける哀傷悲泣の亦あつたあ現卿九郎が短慮は計恨  
むあ死人を怨もて可惜命を限せしる自業自得とひるる初を推す借なき

阿夏より夏起りてこれいそあれ世の風聞ゆも彼陶生と情由ありしと卿九郎が婿  
くあつて罪と贖ら身を殺して獨没あつたあ人あつたあ虚説あつたあ恨めしの浮城  
や形もつら身やといわれと胸あ燃る火のあつたあ折あ觸て木偶女と追あつたあ  
あつたあつたあ常あ変りく債ると苛刻く阿夏と面を對しても眼  
詰り辭を被けむ胡越のあつたあ木偶女が愚會あつたあ事情をうもあつたあ  
と人の噂を洩しあつたあ瀬十郎が言あつたあ趣今あつたあ半信半疑とそれ秋とあつたあ  
あつたああつたあ彼美男子の故あつたああつたあ周防の山口あつたああつたあ人け  
あつたああつたあ後あつたああつたあ母屋のあつたあ龜六あつたあ者猛あつたあ氣色あつたあ疎あつたあ  
愉あつたああつたあ況や口の祥あつたああつたあ人の噂の耳あつたあ障あつたあ京師あつたあ住あつたあ果あつたああつたあ鎌倉  
京あつたあ芳あつたああつたあ敏あつたああつたあ奉の都會あつたああつたあ彼地あつたあ亦あつたあ兵火あつたあ荒あつたあて且あつたあ管領あつたあ山内家と  
扇あつたあ谷殿と睡あつたああつたああつたあ贖伊豆相摸る北條殿と戦あつたああつたあ年あつたああつたあ絶あつたああつたああつたああつたああつたあ

昔の鎌倉の御成程もあつたれども然とも生活の便著るといふに彼地小程り  
 住むるべし又佳事の多うなればと又入り起し云々と阿夏も告ぐ相譚ひを阿夏も  
 思ふよりや京師の住居ともあつたこととて瀬十郎ぬき遠くともいふもあつた世  
 間舅姑の味を他郷に移る人改りて多く後を去る一尋思する一譚及ばざるも  
 多うと思はれども準備もあつた木偶次飲びて家材雜具の送るも活却しく  
 盤纏とやら行装を整へるその日借金を龜六に返して四隣合壁別を告今茲九  
 つ、才のさける小夏と云ふ才のさける珠之次と肩のりあるせも夫婦父子して四人の  
 年捌月の下流小東と投て起行り東海道への春より処々戦ひ絶え新関も  
 亦まうと豫て宿をさるるれ岐路をよめれとこの日七八里の路を辿り守山に  
 驛小宿を投りぬきて第三日の未の比磨鉞山嶺を越えんと然ても折々行装む  
 女兒小夏も多し掖扶けて珠之次を背負ふる夫婦が辛苦のさうもあつた急と

果敢と山路の人の往還稀なる下晡小るる隨ち草萱小條原の取く虫の  
 声も高峰小近づ程をあれ一叢最敏な樹植の間より顯れ出る兩箇の癖者  
 身長五尺七八寸一箇の六尺中も及ぶ一蓬頭巾小胴金作の巨刀腰小苛めたるか  
 打扮の回もあつた彼張樊が侍るらるる関の太郎が子孫あると思ふも僻目小あつ  
 たり當下兩箇の癖者の先後小立塞りく研小御音く声をあがり立をれ行客  
 騒がせるせも又寡の知れず盤纏身皮骨折甲斐のあつたとてと杉枯比の酒  
 價のさるる拾元東西のあつたと脱と左右方齊一刀を果れと引抜は吐  
 嗟と叫ぶ女房女兒と共に魂銷る木偶次の歯牙も合は戦慄れく歯青ら脱  
 多と抗て喜曼山の高家君達やと俺們的京師を世渡る楫が廻らね世帯果登  
 倉卒廻國路費といふゆへ懐財限の進せん衣裳の免しとと賂は  
 腰と搔撈りて稍とら出ま連婚錢を兩箇の賊のさうりもせで眼と睜らす声





立ち賊ハ駭怖れ泣入るる小足を同搔く珠之成と目上高き揚て  
 やよ是女これを名よ俺們両箇の脚あるの後下と父の詞も語も用らば今この  
 餓饑を谷底へ小女良とあるト土なせんを思案せ切替て俺們さあの内を  
 後の親も子も魚肉で美飯の年中安樂否故成致と左右より邪慳で口  
 説く小児を質種回報せどろぐ存亡の域と也へ口隱る母の歎と子の叫び  
 冥夫の呵責磨滅の名の肩けん劍の山紅蓮の涙焦熱の湯とあるまじ  
 しくよりも夏阿夏の裏く骨を鎮めく涙の淵も思やう今然と述て争ふとも  
 両箇の雙言を敷きゆのあはれ又後小親も子も殺されて何の益りあらんか  
 ぞあれれくもあれ偶舉けし男児の珠之成と恙もある年長成人の後には  
 復たよすがもあらん歌辭伎のよまも常盤前の子の仇小後ひ一例もあるを  
 のぞつれさるりの思慮るらばや。這身ひとと両箇の男小任を宿遊

女の物も一ゆるた取られとも時の要あり鼻も刺りか身は只今この山路を殺され  
 めれと思ひる何れ厭ふこのあはれ呼余ると吐裡小尋思と涙を飲めて彼  
 方此方の両箇の賊をうち向上又ええと喃刀袷遠く景趣せりあはれ谷底  
 一投は腰れの継子ゆくその極見血をとりうが身勝ぬあはれ地を走  
 ば獸天鹿が鳥も子も多迷ひぬのあはれや今よりしてその極見を養ふてあは  
 れふれこころ背くは命を助けぬとあはれ然る兩箇の山賊を珠之成を扛卸  
 きてはさくと頭を捨り背拵を遠く阿夏の遊とて圓る目を細くあはれ合  
 笑と通怜憫た女房も路傍の苦背門の柳靡なき損のまはれ今より  
 去く俺們を慰めてのらふこの子の俺們両箇の親もものぞ疎ふせんやあはれ  
 われとも機を緩さして脱走らんと謀るあはれや虚を肌を寛いがかの向う非  
 哩と當り知るその腰の中十両あり且その金を預けりとのりも航く左

右よりさや引出し長財囊の珠之奴の為ふと頼十郎の脱せし置土産  
 る金もれども夫も深く隠してとて来しものを惜まむとあらはれし阿容も々  
 と取られて惜しはふえらるるの亦せん樹のまらりり。却謀両箇の山賊の本偶々行李と  
 衣裳を取て肩ふらち被阿夏親子とて立て何処とて伴の程も幾もあて只  
 暮るるの地の總く山又山の羊腸の知道と辿るも一維葛又松柏枝まて  
 樹下弥闇く崑石道小横りと推路言の滑る。仰て蒼天を瞻れ閃々星の  
 光も夜風の秋既深る。俯て山河を渡ると流消々る水の音小壺折ら裳且濡ん  
 と本邦の大江山唐土の白猿傳鬼魅妖怪捉はれる良家の婦女子もめくあり  
 けん。累阿夏は難とて岩根の身を倚せ樹幹の携るごとく動もされ後と一  
 箇の賊の食と食り腰を推て杖掖れ又一箇の賊の珠之奴を扛抱て声をけし氣  
 換へ左右小慰めり初めり若如之程の時移りて天の光明るは比は這面賊が

巢穴の来り登時阿夏の彼此と頭を叩て家の光景を素木の柱の  
 檐月の漏る宿のわら素言は何人住捨らん道場は菴室なり庵漏の管と  
 水と引た坐席の庭を言とて天然の風景の家具調度とゆら夜物を綴  
 羅と竭せし何地の豪家の所蔵るけん大約その為体彼金山の洞欵とあへ亦  
 支黨あるを膽吹の鬼の宿るを袴無保輔の隠宅も似るも然程  
 件の二賊の阿夏珠之奴と勦も奥まりる処小休せ早飯を炊きとて町  
 管待も抑る山賊の一箇の十々鬼夜行太と喚れ一箇の野干王黒と喚れ  
 初の肥後の飯田山を川角頭太連盈も下りて小連盈のぬる永正六生  
 春の比備中又弘元捕捕れて支黨もさる討滅されり。とて夜行太  
 と黒之の辛く討ちの鋒頭を殺脱て遠く近江路落弟坂田郡佛生山の奥  
 深く巢穴を占く三稔以来ある然に這地方の磨鍼中山善谷佛生と連



Blank page with faint bleed-through from the reverse side.

Page with faint bleed-through text and a vertical grey smudge. The bleed-through text is illegible but appears to be arranged in columns.

Vertical text on the right edge of the page, likely a page number or title. The characters are partially obscured by the binding.

Vertical text on the right edge of the page, likely a page number or title. The characters are partially obscured by the binding.

